

# 家族構成が子どもの社会性に与える影響

## —家庭環境に着目して—

工藤沙季・佐藤優・中島日向子・松本紗季  
(東北大学教育学部)

### 1. 問題の所在と本研究の目的

本研究の目的は、二世帯世帯、三世帯世帯、ひとり親世帯といった家族構成は子どもの社会性に影響を与えるのか、また、その際に家庭環境の良し悪しが大きな決定要因となるのではないかとこの予測のもと、調査・分析を行い、それらの関連を明らかにすることである。

日本の家族構成は年々変化している。厚生労働省の国民生活基礎調査によると、核家族の割合は1955年には三世帯世帯の割合と同程度だったが、1980年には三世帯世帯の割合の約4倍にまで増加し、その後は6割前後で推移した。一方、三世帯世帯の割合は一貫して減少し、1970年には2割を下回り、現在では1割となっている。このように現在の日本では、三世帯世帯が減少し、核家族世帯が増加しているといえる。

高畑らはこれらの家族構成の変化により「生活時間の個別化に伴う家族間コミュニケーション不足、家族の小規模化など、いたるところに人間相互の関わり不足がみられる」と言っている(高畑ほか 2006)。

また、家族構成と同様に、日本の産業構造も年々変化している。農林漁業からなる第一次産業の割合が1955年から2008年まで継続して低下する中で、鉱業や建設業などの第二次産業の割合は1950年代後半以降、高度経済成長による工業化の進展で、大きく上昇した。しかし1970年代後半以降は、第二次産業の割合は徐々に低下し、かわってサービス

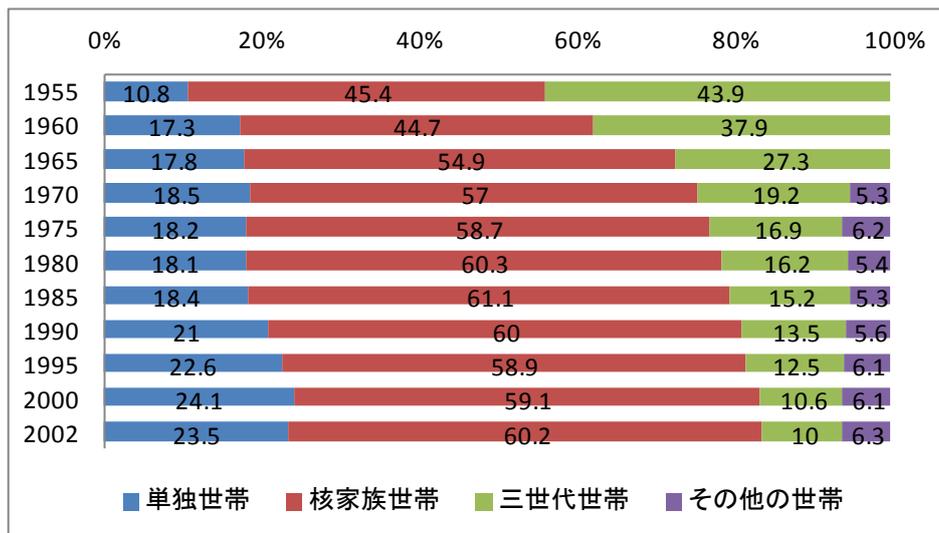


図1 世帯構造別に見た世帯の構成割合の推移 (単位: %)

厚生労働省『平成15年版厚生労働白書』をもとに作成

業などの第三次産業のウェイトが高まった。八幡は「サービス業務とスタッフ部門の役割を担う人員が増える傾向にあり、対人折働能力を備えた人材や高度な知識に裏づけられた人材へのニーズが高まっている」と論じている（八幡 2009）。

## 2. 仮説

先ほど述べたように、現在の日本では、三世帯世帯が減少し核家族世帯が増えるという家族構成の変化により、祖父母など多様な大人と関わる機会が以前に比べ減少している。渡辺（1999）は「子どもの社会空間は、さまざまな他者がかかわる複雑なものから、親のみ、母親のみがかかわるといった非常に単純な構造に変化した。」と指摘する。また田島らは「現代の子どもたちは、少子化や核家族化の進行などにより、自分と親以外の3人以上からなる関係世界を体験することや、地域社会において異年齢・異世代の人との交流する機会が少なく、社会全体として子どもの社会性を育む力が落ちてきている。」（田島ほか 2008）と論じている。このことから、第三次産業が大きなウェイトを占めるようになった現代社会で重要視されている社会性は、子ども時代に関わる大人の人数や子ども時代に経験する家族構成によって生まれ方に差が生まれるのではないだろうかと考えた。また、単純に関わる大人の人数や世代数が多いからと言って、社会性が高まるかといったら、そうはいかないだろう。そこには関わりをもつ環境の良し悪しも関係してくるのではないだろうかと考えた。そこで、子どもの社会性が家族構成や家庭環境によって影響を受けているとしたら、同居している世代数の多い家族構成であれば、生活の中でより多くの大人と触れ合うことができ、たくさんのことを学ぶことができる。また家庭環境が良ければ、社会的に良いことと悪いことの分別をつける教育をするための雰囲気や家庭の中で出来上がっていると考えられる。すなわち、世代数の多い家族構成や、家庭環境が良い家庭を経験しているほど、子どもの社会性は身につくと考えられる。以上から、私たちは「家庭環境の

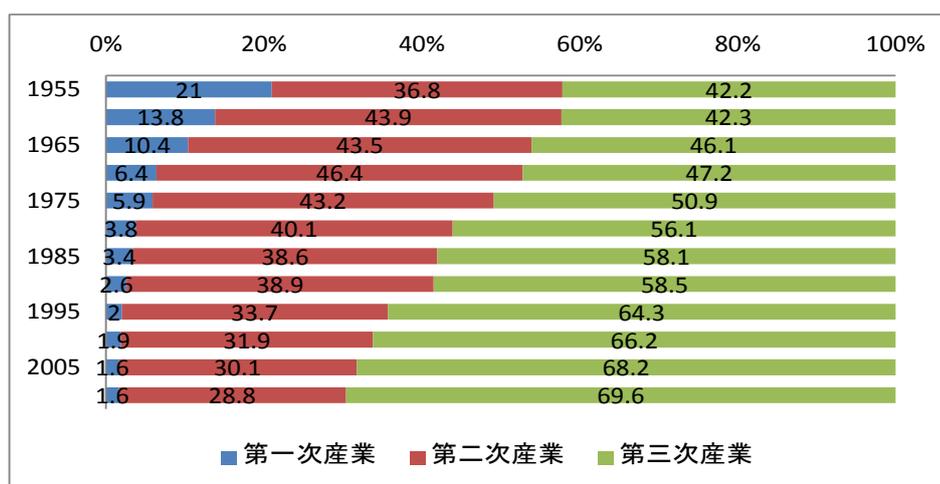


図2 産業の構成割合の推移（単位：％）

厚生労働省『平成22年厚生労働白書』をもとに作成

良い三世同居世帯の方が、社会性がより身につく」という仮説を立てた。

なお、ここでいう社会性とは、最も広義の定義では「その社会が支持する生活習慣、価値規範、行動基準などにそった行動がとれるという全般的な社会的適応性」(繁多 1991) のことであり、最も狭義には「他者との円滑な対人関係を営むことができるという対人関係能力」(繁多 1991) のことである。

### 3. データと変数

#### 3. 1. データ

本研究で用いるデータは、東北大学教育学部・教育学実習と山形大学地域教育文化学部・社会調査演習が調査主体となって実施した「若年者のライフスタイルと意識に関する調査」の調査結果である。調査期間は 2012 年 6 月 13 日～2012 年 6 月 25 日、調査母集団は日本全国の 20 歳以上 39 歳以下の非学生の男女、調査方法は郵送調査法であった。ただし、事前の協力伺いと一部質問にはウェブ調査法を用いている。計画サンプルサイズは 500 であり、有効回収票数は 465 (有効回収率は 93%) であった。

#### 3. 2. 変数

本研究では、分析手法として三重クロス表による統計分析を用いる。以下、本研究で用いる変数の算出方法について記述する。分析のために用いる質問項目は全て、回答者の 15 歳時点の状況について尋ねたものである。

##### ①独立変数：家族構成

問 6 (1) 「あなたが同居されていた方をすべて選び、○をつけてください (○はいくつでも)」という質問に対し当てはまるものに回答してもらい、後に家族構成を次の三つに分類した。世代数に注目した分類であるが、ひとり親は特異の二世同居という形で別分類とした。

- ・「三世同居」：自分と親世代の誰かと祖父母世代の誰か
- ・「二世同居」：自分と両親、自分と祖父母
- ・「ひとり親」：自分と父、自分と母、自分と祖父、自分と祖母

回答項目において「6. あなたのおじ・おば」という選択肢を設けたが、ここからはおじ・おば両方と住んでいたのか、どちらか片方と住んでいたのか判断できかねるため、欠損値扱いとした。また「8. その他の親戚の方」「9. 親戚以外の方」は、その人がどの世代に当てはまるのか定かではないため、同じく欠損値とした。

以上より、分析に用いる回答数  $n$  は  $n=435$  となった。内訳は三世同居が 30%、二世同居が 63%、ひとり親家庭が 7% である。

**表 1 社会的スキル質問内容**

(4) 15歳の頃のあなたご自身の以下の様子について、最も近いものに1つずつ○をつけてください。

	いつも そうだ	そうだ	そうで ない	全然そうで ない
A. 友達が失敗したら、励ましてあげる	1	2	3	4
B. 困っている友達を助けてあげる	1	2	3	4
C. 相手の気持ちを考えて話す	1	2	3	4
D. 引き受けたことは、最後までやり通す	1	2	3	4
E. 自分に親切にしてくれる友達には、親切にしてあげる	1	2	3	4
F. 友達の意見に反対するときには、きちんとその理由を言う	1	2	3	4
G. 友達の頼みをよく聞いてあげる	1	2	3	4

②従属変数：社会性

社会性の指標には、社会的スキルを用いた。社会的スキルとは、高山（1992）によると「有効な社会的スキルとは社会的な相互交流において、一般に好ましい結果がそこに生ずるような一連の社会的行動のこと」、中田（2001）によると「他者から正の反応を引き出し、負の反応を減少させる形で相互作用を行うことを可能にする社会的に受容される学習された行動」と定義されている。このことを踏まえ、質問項目は日本教育心理学会の『日本心理学研究』「母親の養育態度が小学生の社会的スキルと学校適応におよぼす影響：積極的拒否型の養育態度の観点から」（戸ヶ崎 1997, 坂野 1997）より、因子負荷量の数値的にみて信用できるものを用いた。

質問項目は表1の通りである。点数は全て反転させ、加点法を用いて計算した。その上で社会的スキルを三分類に分け、21~28点を「高い」、14~20点を「普通」、7~13点を「低い」とした。質問内容からもわかるように、社会的スキルの高低は主観的なものであることに注意したい。

③第三変数：家庭環境

問6(3)「あなたが15歳の頃、ご家庭はどのような感じがしましたか。」という質問の「あたたかい感じがする、楽しい、ほっとする」のそれぞれの項目について、回答者本人がどのように感じていたのかを「そう思う、少しそう思う、あまり思わない、そう思わない」の四段階で評価してもらった。従属変数と同様に加点して計算し、7~12点を家庭環境が「良い」、3~6点を家庭環境が「良くない」とした。これも社会的スキルと同じく、回答者の主観的評価による分類となっている。

4. 具体的予測

仮説、データ、変数の説明を踏まえ、仮説に対する私たちの具体的予測について記述する。私たちは、家庭環境が良い場合と家庭環境が良くない場合に、それぞれ違った結果が出ると予測した。特に注目したい箇所は、世代間交流の有無が子どもの社会性にどのように影響するのか、である。

まず、家庭環境が良い場合は、三世代同居、二世代同居、ひとり親の順に社会的スキルが高くなるだろうと考えた。家庭環境が良い中で、多くの世代との交流を持つことができる三世代世帯の子どもは、自分の社会的役割を自覚し、社会性がより高くなるだろうという予測である。

次に、家庭環境が良くない場合は、家族構成に関わらず全体的に社会的スキルは低くなる傾向があり、中でもひとり親世帯が最も低い結果を示すだろうと考えた。ひとり親世帯の場合、大人が家にいる機会が他の世帯に比べて多くないだろうと予測できるからである。

以上を踏まえ、次に分析結果を示す。

## 5. 分析結果

子どもの頃の家族構成、家庭環境、社会的スキルの値の該当数の分布を以下の表に示した。これらの数値を元に、仮説「家庭環境の良い三世代同居世帯の方が、社会的スキルがより身につく」を確かめるため、検証を進めた。

### 5. 1. 家族構成と社会的スキル

まずは家族構成と社会的スキルの間に関連が見られるかどうかを検証した。その結果を表 5 に示した。

表 5 からは、社会的スキルの高低において三世代同居世帯、二世代同居世帯、ひとり親世帯それぞれの構成比に大きな違いを見ることはできない。さらに、家族構成を独立変数、社会的スキルを従属変数としてカイ 2 乗検定を行うと、カイ 2 乗値は 7.465 となり統計的に有意な関連は見られなかった。すなわち、家族構成が社会的スキルに影響を及ぼしているとは言えず、家族構成と社会的スキルの間には関連がないと解釈できる。このような結果が生じた理由として、家族構成それ自体ではなく、そこから生じる家庭環境の差異をはじめとする要素が、社会的スキルに影響を与えていると考えられる。

また、社会的スキルを高・低の二分にすると表 5-2 が得られる。表 5-1 と 5-2 を比べてわかるように、どの家族構成であろうと約 2 割は社会的スキルが低く、約 8 割は社会的ス

表 2 子どもの頃の家族構成

	度数	パーセント	統計量	
三世代同居	131	29.8	度数	有効 440 欠損値 25
二世代同居	275	62.5		
ひとり親	34	7.7		
合計	440	100.0		

表 3 子どもの頃の社会的スキル

	度数	パーセント	統計量	
高い	153	33.3	度数	有効 459 欠損値 6
普通	282	61.4		
低い	24	5.2		
合計	459	100.0		

表 4 子どもの頃の家庭環境

	度数	パーセント	統計量	
良い	339	73.9	度数	有効 459 欠損値 6
良くない	120	26.1		
合計	459	100.0		

表 5-1 家族構成 と 社会的スキルのクロス集計表

		社会的スキル			合計	
		高い	普通	低い		
家族構成	三世代	度数	41	85	5	131
	同居	%	31%	65%	4%	100%
	二世帯	度数	91	167	13	271
	同居	%	34%	62%	5%	100%
	ひとり親	度数	15	14	4	33
		%	45%	42%	12%	100%
合計	度数	147	266	22	435	
	%	34%	61%	5%	100%	

$\chi^2=7.465$  n.s.

表 5-2 家族構成と社会的スキルのクロス集計表

		社会的スキル		合計	
		高い	低い		
家族構成	三世代	度数	111	20	131
	同居	%	85%	15%	100%
	二世帯	度数	228	43	271
	同居	%	84%	16%	100%
	ひとり親	度数	27	6	33
	親	%	82%	18%	100%
合計	度数	366	69	435	
	%	84%	16%	100%	

$\chi^2=0.168$  n.s.

**表 6 家族構成 と 家庭環境のクロス集計表**

		家庭環境		合計	
		良い	良くない		
家族構成	三世代	度数	106	25	131
	同居	%	81%	19%	100%
	二世代	度数	204	71	275
	同居	%	74%	26%	100%
	ひとり親	度数	14	19	33
		%	42%	58%	100%
合計		度数	324	115	439
		%	74%	26%	100%

$$\chi^2=20.255 \quad p<.01$$

キルが高いという結果を示している。すなわち、表 5-1 ではひとり親世帯の子どもの社会的スキルが比較的低いように見えるが、実際には、家族構成によって大きな差は生じないのである。

## 5. 2. 家族構成と家庭環境

次に、家族構成と家庭環境の間に関連が見られるかどうかを検証した。その結果を表 6 に示した。

表 6 からは、三世代同居世帯と二世代同居世帯の間に家庭環境の差はあまり見られないものの、ひとり親世帯のみが特異な結果を示していることがわかる。ここで、家族構成を独立変数、家庭環境を従属変数としてカイ 2 乗検定を行うと、カイ 2 乗値は 20.255 となり、1%水準で有意な関連が見られた。家族構成の中でも特に、ひとり親世帯の場合には二世代同居と同じ世帯数にも関わらず、家庭環境が良くないと感じる子どもの割合が多い。つまり、ひとり親世帯が強い負の要素を持っているためにカイ 2 乗検定において有意な関連が見られたとも考えられる。そこで、表 6 からひとり親世帯を除いて、再び家族構成と家庭環境の間に関連が見られるかどうかを検証してみることにした。

## 5. 3. ひとり親世帯を除いた場合の家族構成と家庭環境

表 6 をもとにして、ひとり親世帯を除いた家族構成を独立変数、家庭環境を従属変数としたカイ 2 乗検定を行ったところ、カイ 2 乗値は 2.229 となった。この結果、先程は見られた有意な関連が見られなくなった。この点に関しては、上述したように、家庭環境が良くないと感じている子どもが過半数を占めるひとり親世帯の結果が大きく影響し、全体として家族構成と家庭環境の間に関連があるように見えていたことが考えられる。すなわち、ひとり親世帯か否かが家庭環境の良し悪しを決める要因であり、二世代同居か三世代同居かは重要な事項でない。祖父母と同居すれば家庭環境が良くなるとは言えず、むしろ着目すべきは、子どもが両親と同居している家庭なのか、ひとり親家庭なのかという点なので

表 7 家庭環境と社会的スキルのクロス集計表

		社会的スキル			合計
		高い	普通	低い	
家庭環境 良い	度数	115	211	11	337
	%	34%	63%	3%	100%
家庭環境 良くない	度数	37	68	13	118
	%	31%	58%	11%	100%
合計	度数	152	279	24	455
	%	33%	61%	5%	100%

$$\chi^2=10.514 \quad p<.01$$

表 8 家庭環境層別に見た、家族構成と社会的スキルのクロス集計表

家族構成		家庭環境良い				家庭環境良くない			
		社会的スキル			合計	社会的スキル			合計
		高い	普通	低い		高い	普通	低い	
三世代 同居	度数	37	68	1	106	4	17	4	25
	%	35%	64%	1%	100%	16%	68%	16%	100%
二世世代 同居	度数	67	127	8	202	24	40	5	69
	%	33%	63%	4%	100%	35%	58%	7%	100%
ひとり親	度数	7	6	1	14	8	8	3	19
	%	50%	43%	7%	100%	42%	42%	16%	100%
合計	度数	111	201	10	322	111	201	10	113
	%	34%	62%	3%	100%	34%	62%	3%	100%

ある。

#### 5. 4. 家庭環境と社会的スキル

次に、家庭環境と社会的スキルの間に関連が見られるかどうかを検証した。その結果が表 7 である。

表 7 から、家庭環境が良いと感じる子どもの方は社会的スキルが高い割合が大きく、家庭環境が良くないと感じる子どもの方は社会的スキルが低い割合が大きいことがわかる。

ここで家庭環境を独立変数、社会的スキルを従属変数としてカイ 2 乗検定を行ったところ、カイ 2 乗値は 10.514 となり 1%水準で有意な関連が見られた。すなわち、家庭環境と社会的スキルの間には関連があり、家庭環境が良いと感じられる家庭で育つ子どもの方が社会的スキルは高い傾向にあると解釈できる。

### 5. 3. 三重クロス表

家族構成，社会的スキル，家庭環境の三変数のクロス集計表を作成し，表 8 として示した．分析した結果，三変数間には有意な関連が見られなかった．すなわち，家庭環境の良し悪しに関わらず，家族構成と社会的スキルに有意な関連は存在しない．祖父母と同居していようが，ひとり親家庭であろうが，子どもの社会的スキルには関係ないのである．

家族構成はさておき，社会的スキルは，家庭環境が良ければ高く，家庭環境が悪ければ低くなる傾向を表から理解することができる．しかし，二世帯同居世帯に着目すると，家庭環境が良くない場合に社会的スキルの高い割合が増えており（35%），家庭環境が良いから社会的スキルが高いと一概に言うことはできない．

以上より，「家庭環境の良い三世帯同居世帯で育つ子どもの方が社会性がより身に付く」という仮説は一部分しか当たっていない．すなわち，家庭環境の良い家庭で育つと社会性がより身に付く傾向は認められるものの，三世帯同居世帯か二世帯同居世帯かは，子どもの社会的スキルに影響を及ぼさない．三変数の関係を図 3 に示す．

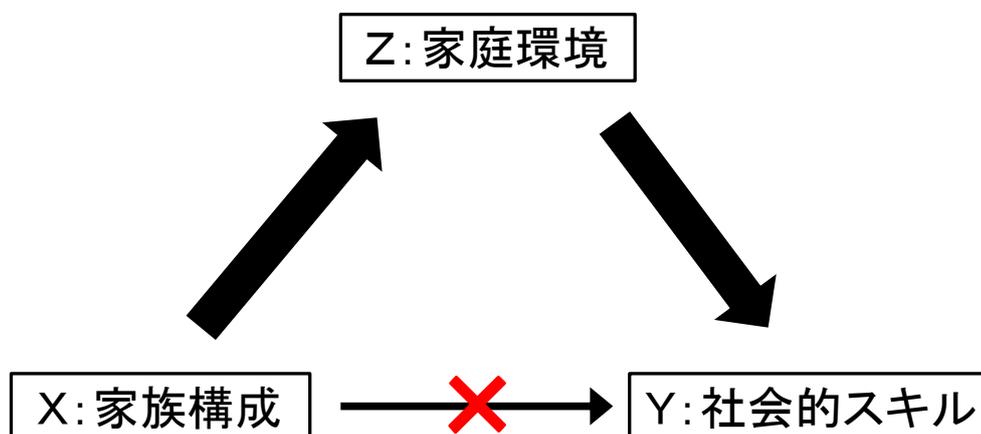


図 3 三変数間の関係

## 6. 考察

### 6. 1. 結果の解釈

今回の分析では，以下のことが明らかとなった．

- 1) 家族構成の違いは社会的スキルに影響しない．
- 2) 家族構成の違いは家庭環境の良し悪しに影響を与える．ひとり親世帯の子どもの多くが，家庭環境が良くないと感じている．
- 3) 家庭環境は子どもの社会的スキルへ影響を与える．社会的スキルは，家庭環境が良ければ高く，家庭環境が悪ければ低くなる傾向にある．
- 4) 二世帯同居世帯と三世帯同居世帯の子どもは，家庭環境も社会的スキルもほとんど同じ結果を示した．ゆえに，祖父母と同居することにメリットがあるとは言えない．
- 5) 三変数間では有意な関連が見られず，あくまで，家族構成が家庭環境へ，家庭環境が

社会的スキルへ個別に影響を与えている。

6) したがって、家族構成と社会的スキルを結びつける他の要因もあると考えられる。

## 6. 2. 祖父母と同居することの意義

少子高齢化がますます進行する中、私たちは祖父母と同居することの意義について今一度考える必要がある。家族研究の多くはこれまで親子関係に注目しているが、高齢社会では、通常の親子関係に加えて、子—祖父母というもう一つの親子関係が存在しており、この二重階層を無視することはできない（吉井 2001）。

今回の分析では、子どもが祖父母と同居することに大きなメリットはなく、両親と同居しているか否かが重要な意味を持つことがわかった。Park (2008) は、家族構成と教育アスピレーションについての研究を行っており、二人親世帯と三世代世帯（二人親世帯+祖父母同居）間で子どもの教育アスピレーションに有意差が見られないことを指摘している。教育アスピレーションと社会的スキルには乖離があるかもしれないが、祖父母との同居は子どもの内面にそれほど大きな影響を与えないという意味で、今回の分析結果は、これに類似していると考えられる。

祖父母との同居は子どもの社会性の形成に影響しないという今回の分析結果は、残念なものである。したがって、なぜこのような結果が生じるのか、また、祖父母と関わることで子どもの社会性を高めるためには、どのような要件が必要なのかについて考えていく必要がある。

## 6. 3. ひとり親世帯の抱える問題

今回の分析でとりわけ注目すべき点は、ひとり親世帯で育つ子どもの社会的スキルと家庭環境が、他の家族構成に属する子どもよりも明確に良くない結果を示したことである。ひとり親世帯と二人親世帯の間の教育達成や地位達成の格差を説明する論文は数多い。その中でも、Biblarz and Raftery (1999) の論文では、離婚に先立って、または離婚によって生じる夫婦間の不調和 (Marital Conflict) が、ひとり親世帯の子どもの地位達成を二人親世帯よりも低くするという仮説が挙げられている。すなわち、ひとり親世帯の子どもは、両親のけんかにさらされ我慢しながら育つため、当然家庭環境は良いものとは言えず、社会的スキルも低くなると考えられる。今日では、離婚率が高まり、ひとり親世帯がますます増加している。ひとり親世帯の子どもが二人親世帯の子どもと同じように育つことは可能なのか。また、ひとり親世帯の子どもが不利にならないために、どのような対策が考えられるのか、社会はどのようなサポートができるのかを模索しなければならない。

## 6. 4. 今後の課題

祖父母と同居することで、子どもは親とだけ一緒に住むよりも様々な知見が得られ、社会性がより一層身につくという仮説が外れたのはなぜか。理由の一つとして、同居の形態が考えられる。すなわち、三世代同居世帯の中でも、同じ家に住んでいながら1階と2階

で別々に暮らしており、普段からあまり関わりを持たずに生活している場合があり得る。今回の調査においてこの点を考慮できなかったことは、反省すべきところである。また、家庭環境についての質問項目が抽象的であったことが、調査結果に影響を与えた可能性も否めない。

しかしながら、今回の分析によって、

- 1) 子どもにとって祖父母との同居はあまり意味を持たないこと
- 2) ひとり親世帯の子どもをもっと問題視する必要性

を発見することができたのは、意義深いことである。今後は、これらの現象がなぜ生じるのか、そのメカニズムを検証していく必要がある。

## 参考文献

- Biblarz and Raftery, 1999, "Family Structure, Educational Attainment, and Socioeconomic Success: Rethinking the 'Pathology of Matriarchy'," *American Journal of Sociology* 105(2) :321-365.
- 繁多進, 1991, 「社会性の発達とは」繁多進・青柳肇・田島信元・矢沢圭介編『社会性の発達心理学』福村出版, 9-16.
- Hyunjoon Park, 2008, "Effects of single parenthood on educational aspiration and student disengagement in Korea," *Demographic Research* 13 :399-401.
- Michelson, L. et al., 1983, *Social skills assessment and training with children: An Emperically Based Handbook* (=1992, 高山巖訳「社会的スキル訓練モジュール」和田節編『こどもの対人行動—社会的スキル訓練の実際』岩崎学術出版社, 85-105.
- 中田栄, 2001, 「対人関係と自己の発達」塩見邦雄・中田栄編『社会性の心理学』ナカニシヤ出版, 87-96.
- 田島祥・松尾由美・坂元章, 2008 「社会性の育成に関する親や教員の意識—広義の社会性を定義して」『人間文化創成科学論叢』お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科, 11 : 289-297.
- 高畑彩友美・富田圭子・饗庭照美・大谷貴美子, 2006, 「母親の食生活に対する意識や生活充足感が幼稚園に通う子どもとのコミュニケーション頻度に与える影響」『日本家政学会誌』社団法人日本家政学会, 57 (5) : 287-299.
- 戸ヶ崎泰子・坂野雄二, 1997, 「母親の養育態度が小学生の社会的スキルと学校適応におよぼす影響：積極的拒否型の養育態度の観点から」『教育心理学研究』45(2), 173-182.
- 渡辺秀樹編, 1999, 『変容する家族と子ども—家族は子どもたちにとっての資源か』教育出版.
- 八幡成美, 2009, 『職業とキャリア』法政大学出版局, 30-31.
- 吉井弘, 2001, 『祖父母の特別な役割—聞くこと・見ること・話すこと』誠信書房.

